

標題 小豆の産地化を目指して 県内初の小豆省力機械化実証を実施！

(ダイジェスト)

宍道湖西岸地区における大区画ほ場整備後の土地利用型作目の1つに位置づけられている小豆については、単価は高いがほとんどが手作業で規模拡大が難しいという課題があることから、県内初の取組みとして、今年度、小豆の省力機械化実証ほを設置しました。

この度、大手機械メーカーの協力を得ながらコンバインでの刈取りが無事終わり、播種から収穫までの一連の作業体系を確認するとともに今後の課題等を整理しました。

島根県出雲地方において小豆は、正月の小豆雑煮や日本三大菓子処としての松江の和菓子文化、ぜんざい発祥の地と言われる出雲ぜんざいによる町おこしなどに多く利用されており、とても地元産のニーズが高い有望な作物となっています。

そこで、このニーズに応えるため、「宍道湖西岸地区売れるモノづくり検討チーム（出雲市・JAしまね出雲地区本部・島根県等）」の取り組みの一つとして、出雲市灘分町の農事組合法人「下出来洲」に、島根県農業振興協会・JA全農島根農機事務所・クボタアグリサービス(株)・金子農機(株)などの協力を得ながら10aの実証ほを設置しました。

まず、7月20日、丹波大納言小豆を用いトラクターで、耕起+播種+除草剤散布の一連の作業を狭条密播栽培（条間30cm×株間20cm、8条播き、1か所1～2粒播き）を実施しました。次に、乾燥が続いたため8月5日に畦間かん水を実施、9月にはハスモンヨトウ等の病害虫防除を行い、12月12日には普通形コンバインで収穫を行いました。

そして、今後は金子農機(株)の協力を得ながら乾燥・調製（粗選機、色彩選別機）を行う予定ですが、これまでの取り組みで、いくつかの課題が見え、来年以降、関係機関等と連携しながら解決していきたいと考えています。

- ① 品種：今回用いた品種は、出雲市で一般的に栽培されている丹波大納言小豆（秋アズキ）であり、天候の不安定な12月では刈り遅れにより収量や品質の低下が起きやすく、今後は、夏アズキや中間型等収穫期の早い品種の検討が必要です。
- ② 栽培：湿害や刈り遅れ等により目標収量の120kg/10aには至りませんでした。今後は、施肥方法や排水対策等の技術課題の解決が必要です。
- ③ 販売：更なる有利販売につなげるため販売先（卸・小売店・業務店）を把握し、ニーズ調査（量・単価・品質）を行うことが必要で、今後、地元の商工会議所等と連携します。



トラクターで播種（7/20）



小豆の生育状況（8/上旬・11/下旬）



コンバインで収穫（12/12）